

環境学委員会環境政策・環境計画分科会(第 25 期・第 2 回)

日時： 2021 年 2 月 19 日(金)18:00-20:00

会場： 遠隔会議

出席者：

分科会委員：大久保規子，大塚直（委員長），高村ゆかり，馬奈木俊介，春山成子，桑野園子，栗山浩一，村上暁信，渡辺浩平

環境学委員会：浅見真理，西條辰義

ゲストスピーカー：田崎智宏（国立環境研究所）

議題

- (1) 報告者 田崎智宏氏（国立研究開発法人国立環境研究所資源循環・廃棄物研究センター循環型社会システム研究室室長） テーマ「サーキュラー・エコノミーの理念，期待，そして限界」
- 田崎智宏氏から話題提供がなされた。サーキュラー・エコノミー（CE）の理念とその形成経緯，マスマランス，ISO 化，指標などの解説，さらに近年の動向を踏まえて限界について説明がされた。EU での議論や原文に関係なく，自身の意見を主張するために使われているケースが散見されること，ステークホルダーがどのような主張がされているかを理解することは意義であること，期待と事実の的確な区別が求められることが示された。
 - 大塚委員長：とても興味深い内容だった。全般的な関係を整理したい。日本でも循環型社会基本を作るなど取り組みの経緯がある。そのようなこれまでの日本の流れをこれからどう変えていくべきなのかについて再度意見を戴きたい。当時とは異なって，ESG 投資の拡大などの状況変化もある。
 - 田崎氏：日本で進めるためには，民間企業の意識をどう変えていくかが重要である。3R が最低限やらなくてはならないことという意識があるが，これはビジネスにはならず足かせという認識がなされている。この認識のままだと CE は展開しない。市場の流れの中で進められるように，意識を転換する必要がある。Repair については，EU の中で低品質な製品を排除したいという思いから議論が展開している。
 - 大塚委員長：日本がどういう方向に向かっていくべきかという点については，どうなのか。
 - 田崎氏：基本的には CE の流れに乗らないといけない。ただ重視すべき順番，取り組むべき順番が違うのではないかと考えている。
 - 大塚委員長：産業界の中で 3R と同一視している人たちがいるということだが，CE の中の一つの取り組みともいえるのではないのか。
 - 田崎氏：その通りだが，3R だけだと思って意識が固定している点が問題である。
 - 浅見委員：金属で原材料自給率という点では高いという話だったが，それについては今後も自給率を高めるといふ展開が期待できるのか。
 - 田崎氏：クリティカルマテリアルということで EU では関心が非常に高いということ。他のものについてはそれぞれに状況が違って来る。
 - 大塚委員長：レアメタルについては関心が高いのだが，化学物質についても同様に議論が展開す

るのかはわからない。SDS 制度の話は EU の廃棄物法制で出てきているのか。

- 田崎氏：EU でも有害物質を特定化する方向で法改正が行われるなどの取り組みはなされている。
- 桑野委員：今日の話は大変興味深かった。質問が2つある。日本で CE が実現できている例があるか。これを実現するためには、企業だけではなく行政、個人消費者も含めた大きな枠組みで考えていく必要があるだろう。その点についていいアイデアはあるか。
- 田崎氏：海洋から回収したプラスチックを使って製品にしている例がある。他にも BtoB で部品ごとにリユースしたり、リペアして使ったりしている例がある。2つめの質問については、4つの X について話したが、技術的なものだけでなく、アクションにつなげていく必要がある。日本の法制度の枠組みではアクションが起きそうになるのを阻害している部分があり、その部分を除いていく必要がある。
- 大塚委員長：環境省としては不法投棄を恐れているので、その点に関わる規制が多く残っているのだが、なかなか規制緩和に手を入れられない状況にある。
- 田崎氏：生産者ではない人が資源循環を行うときに既存の廃掃法が壁となる。Amazon などの流通者も CE では重要な役割を持つが、寡占の問題もある。
- 大久保委員：A~D の X はわかりやすい。話の中で、リサイクルしているつもりでリサイクルできていないことがある、というご指摘だった。後半で仕向率の話があったが、指摘の点の解決につながるのか。2点目は、EU では全体の CE といった場合には市民にとって、実践的な指標はあるのか。紹介された指標は少し抽象的なものではないかと感じた。拡大生産者責任に関する最低限の操業条件の導入は EU で十分に展開しなかった理由はなにか。経済効果についての話にでてきた数字は荒い数字のように感じたが、かなり期待を込めた数字なのか。
- 田崎氏：日本における状況を見ると、国際比較をするためにも回収状況だけを評価できても、実際にリサイクルに向けられている部分を評価することが重要ではないかと考えている。また手法を改善することを考える上でもこの2つを分けて評価する必要があるのではないかと思っている。水の利用を始めとする身近なことについては十分に情報を持っていないが、水の循環利用や飲料水に関する EU 指令などがあり、今後進むと思われる。拡大生産者責任に関する最低限の操業条件の導入は、EU 側では特に強い関心を寄せてなかったということかと思っている。経済効果については精度については十分な情報を持っていない。
- 西條委員：なぜ世界の中でヨーロッパで議論が進んでいるのか。日本と比較してもヨーロッパでは制度や定義も議論が進んでいるようだがその理由は何か。またプラネタリーバウンダリーの話があったが、CE の話とプラネタリーバウンダリーの話はどう繋がっているのか。
- 田崎氏：プラネタリーバウンダリーへの指標という点では、物質循環では推計が行われているが、環境負荷に関しては十分な指標は提示されていない。それは今後の非常に大きな課題である。なぜヨーロッパが進んだか、というのは十分な回答は有していないが、従来から環境に関する議論は EU が進んできたのも一つの理由だろう。それから元々 EU では国を超えて方針を示すという性格があり、それが機能しているのではないか。
- 大塚委員長：気候変動と CE の関係はどういう展開が予想できるか。環境負荷という点では共通するが若干考え方が違うのではないかと思うがどうか。資源循環が先か、カーボンニュートラルが先かと言われたら、良いことではないが今はカーボンニュートラルが先と考える人が多いの

ではないか。

- 田崎氏：バイオマス系資源が関わりが強いと思うが、バイオマスといえど資源を枯渇させないようにするなどのことが考えられている。気候変動の点からは化石燃料を減らす必要があるが、脱炭素で資源利用が変化していく中で資源循環を考える必要がある。
- 渡辺委員：リサイクル仕向率についてだが、ヨーロッパでは仕向率でリサイクルを評価したために、リサイクルの質が大きく下がって別の問題を引き起こしたということがある。またリサイクル高度化指標については、こっちを上げるとこっちが下がるという関係があるので、重み付け以外にこのような関係に対処する方法はあるのか。公共交通で自家用車を不要とする、肉の消費量を減らす、不便でもプラスチック使用を減らすなどトレードオフがあるものにはCEでは実現できないのでは。
- 田崎氏：仕向率については、これ一つでやっていくということではない。むしろ一つだけでやっていくことが問題だろうということをも主張したい。2点目のトレードオフについては、トレードオフの指標は確かに使わないほうがいいと思っている。一般論では目標設定をする指標とモニタリングの指標があると思うが、それらの使い方が重要だと思う。移動を減らす、ものを減らすなどリデュースに関するものはビジネスにならないので、CEは難しい。
- 渡辺委員：3RとCEでは、リデュースが最も良いので3Rの方がいい面もあるのでは。
- 田崎氏：長寿命化という点でのリデュースはCEにも入っているが、ものを減らすというリデュースは入っていない。
- 馬奈木委員：EVを活用したサービスの提供等の動きが交通業界では進んでいるが、そのようなことはCEの中でも展開されているのか。
- 田崎氏：アクセントの提案などでもそのような考えが入っている。
- 高村委員：自然の物理法則に過度の期待がされている、という指摘があったが、その背景は何か。
- 田崎氏：ビジネスに展開できるかどうかという視点だけからCEを考える人が多いという事実がある。
- 高村委員：気候変動は指標が一つなので金融市場と接合しやすい。CEでも指標ができれば金融と接合できる。ここに研究者の役割がある。確かに十分な展開ではないが、リーマンショック以降環境に関する話と市場経済の関係は密になりつつあるといえるだろう。
- 大塚委員長：マスバランス法の懸念は、どういう場合に起きるのか。
- 田崎氏：マスバランス法はビジネスを作ることが目的になっているのが興味深い。理論的に不可能な100%リサイクルのようなものも入れるのか、上限を設けるのか。マテリアルリサイクルで努力して50%プラスチックを使ったものと競争がどうなるのか。一部の製品だけが評価されてしまうのでは。
- 大塚委員長：CEは経済で、循環型社会ではない、最後は社会であるべきという人もいる。
- 田崎氏：CEが進められるところはCEが進めればよい。できないところは、いままでの法制度で進めればよい。

(2) その他

- 大塚委員長：今後の議論の進め方について意見を戴きたい。

- 浅見委員：環境学委員会でも報告してもらって、今後他の分科会とも議論を重ねていければと思っている。
- 渡辺委員：私自身はCEが専門だがそれだけでいいのかとも思っている。
- 大塚委員長：CEの他に気候変動と生物多様性のことも議論していきたいと思うが、CEも一度だけでは議論が深められないので、もう少しCEの議論を続けてはどうかと思う。(賛成多数)
- 渡辺委員：CEの限界の話があったが、あまりCEのいい面だけを取り上げるのも違うと思っている。そのような流れで次回の議論のテーマを提案したい。

以上